

キリンの運びかた、教えます

はこ おし
でんしゃ びょういん
電車と病院も!?

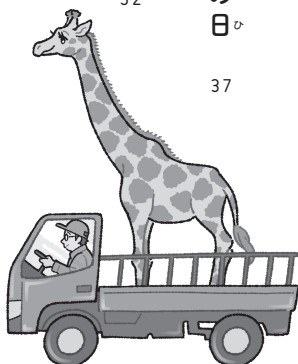
いわ さだ
岩貞るみこ／作 たら子／絵



講談社 青い鳥文庫

キリンのリンゴを運べ！

- 1 キリンの赤ちゃん 6
- 2 愛称は、リンゴ 10
- 3 リンゴのお嫁入り、決まる 17
- 4 引越しのための訓練 26
- 5 上野動物園の準備 32
- 6 盛岡市動物公園、さいごの日 37
- 7 南へ走る 45
- 8 上野動物園についた！ 52
- 9 新しいキリン舎 61
- 10 リンゴとヒナタ 64



キリンの
運びかた、
教えます

電車と病院も!?

もくじ

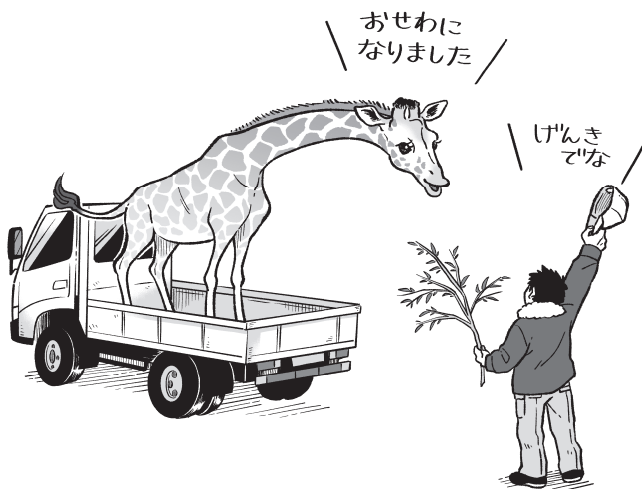
	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2
あとがき	引越プロジェクト、完了	こどもたちを運ぶ	カウントダウン	あと一か月	たくさんの人たちの協力	荷物のおくれ	リハーサル	具体的な計画	何人のこどもを運ぶか	道順を考える	建物を確認する
218	194	181	178	166	158	151	143	138	133		
	216										



ケース

①

キリンのリンゴを はこ 運べ!



1

1 キリンの赤ちゃん

「うわ、生まれる！」

岩手県にある盛岡市動物公園。

キリン飼育員のリーダーである鈴山が昼休みに見に行く

と、キリンのユズがしつぽを上げ、おなかに力を入れて産もうとしていた。

鈴山は、あわててユズから見えないところにかくれた。

人がいると、ユズが出産に集中できなくなるからだ。

自然のなかで動物たちは、人の手を借りずに出産する。

動物園でも、キリンが落ちついて出産できるよう部屋のなかをととのえたら、できるだ

け飼育員は手を出さないようにしている。

鈴山は、そうつとかくれながら、ユズのようにとりつけておいたビデオ

カメラのモニター画面を見つめた。

ユズのおしりのあたりから、みるみるうちに、赤ちゃんの前脚の先が出てくる。

キリンは背^せが高い^{たか}。ユズのおしりは、地上^{ちじょう}から二メートルの高さ^{たか}だ。

赤^{あか}ちゃん^{あたま}は、頭^{あたま}を下^{した}にしてぶらさがるように出^でてきた。からだ^{からだ}がぜんぶ出^でたら二メートルの高さ^{たか}から落^おちることになるけれど、床^{ゆか}にはふかふかにワラがしきつめてあるし、頭^{あたま}は床^{ゆか}のそばまできているのだけがはしない。

『がんばれ、ユズ！』

『あと、もう少^{すこ}し！』

鈴山^{すずやま}の連絡^{れんらく}をうけて集^{あつ}まってきた飼育員^{しいくいん}が、いつしよにモニター画面^{がめん}を見^みながら、声^{こえ}をひそめて応援^{おうえん}している。

ユズにとって、はじめての出産^{しゅさん}。

どうか、ぶじに生^うまれてほしい。

二時間^{じかんご}後^ご。

「生^うまれた！」

二〇一五年三月二十四日^{ねんがつか}、キリンの赤^{あか}ちゃん^{あか}が生^うまれた。

母親^{ははおや}のユズは、黄^{きいろ}色^{いろ}というより白^{しろ}っぽい色^{いろ}のキリンだ。赤^{あか}ちゃん^{あか}もキリンもユズに似^にて、

色白いろじろのメスだった。

鈴山すずやまたちは、赤ちゃんキリンあかの動きをじつと見みもった。

キリンは、生まれてから一時間じかん以内に立たちあがって、歩あるけるようになる。

いつまでも歩あるけないでいると、ライオンやヒョウに食たべられてしまうからだ。

赤ちゃんキリンあかが、よろよろしながら立たちあがった。

「小さいなあ。」

鈴山すずやまがつぶやいた。

赤ちゃんキリンあかは、すでに背せが一・六メートルくらいある。人間にんげんの大人おとなくらいだ。それ

でも、ほかの赤ちゃんキリンあかにくらべると、ひとまわり小ちいさかった。

「生いきられるかな。」

鈴山すずやまの胸むねに、不安ふあんがよぎる。

キリンの赤ちゃんあかは、弱よわい。アフリカにいる野生やせいのキリンでも、三か月げつ以上じょう、生いきられ

るのは半分はんぶんくらいだ。

小ちいさな赤ちゃんあかなら、さらに生いきていくのがむずかしい。

赤ちゃんキリンが、ユズのおなかのあたりに顔を近づけている。

「お乳を飲もうとしている。」

「生まれたばかりでも、お乳のあるところがわかるなんて、動物ってすごいね。」

モニター画面を見つめながら、飼育員たちがうなずきあっている。

ところがユズは、じつとしていたのはさいしょだけで、赤ちゃんキリンが顔を近づけるたびに、いやがるようにならだの向きを変えてしまう。

「ユズ、じつとして。」

「赤ちゃん、がんばって。」

飼育員たちがそいいいながら見つめるけれど、生まれてから四時間たっても、赤ちゃん

キリンはお乳を飲めないでいた。

「困ったな。」

「このままだと、死んでしまいますよ。」

「あと二時間、待とう。」

鈴山は、二時間だけ待つことにした。

できるだけ、人の手をかしたくない。

動物はもともと、こどもを産み、育てる本能があるのだ。ユズの本能がめばえてくるのを待ちたい。

ユズ、お乳をあげて。

飼育員たちは、祈るような思いでユズを見つめていた。

2

愛称は、リンゴ

「だめだな。ユズから赤ちゃんをはなそう。」

二時間、待ったけれど、ユズはお乳をあげなかった。

母娘がいる部屋にある電動のシャッターを使って、二頭をわせる。

赤ちゃんキリンが見えなくなったユズは、赤ちゃんを探るように、部屋のなかをぐるぐると歩きまわっている。

「お乳をあげたら、すぐに会えるからね。」

飼育員が、ユズにやさしく声をかける。

鈴山は、粉ミルクになつてゐる牛の初乳をお湯でといて哺乳瓶に入れた。ユズがお乳をあげないことを考えて、用意しておいたのだ。

初乳は、母乳でこどもを育てる哺乳動物が、出産後、さいしょに出すお乳のこと。病氣になりにくくなる栄養がたつぷり入つてゐる。

まだふらふらして、すぐにころんでしまいそうな赤ちゃんキリンのからだを、飼育員たちになさえてもらう。鈴山は、哺乳瓶を口元に近づけた。

けれど、赤ちゃんキリンは飲むとうとしない。

しかたなく頭をおさえて、哺乳瓶の先をくわえさせ、お乳を少し口にふくませてみる。それでも、飲みこもうとしなかった。

赤ちゃんキリンにむりをさせないよう休ませながら、数時間おきにいろいろためしてみる。

初乳と牛乳をまぜてみたり、のどをさすつたり。のどに管を入れて、お乳をそのまま胃に流しこもうとしたけれどだめだった。

生まれて五日がたった。

そのあいだ、赤ちゃんキリンが飲んだのは、口にふくんだだけの、ほんのわずかな量だ
け。これでは少なすぎる。それに、自分からお乳を吸うように飲まなければ、飲んだとは
いえないのだ。

もう、だめかもしれない。

鈴山は、獣医師と相談をして、さいごの手段に出た。

お乳を飲まないのは、胃や腸がうまく動いていないせいかもしれない。だったら動くよ
うに注射を試みようということになったのだ。

ただ、生まれたばかりの赤ちゃんに薬を使えば、なにが起こるかわからない。それが原
因で、死んでしまうかもしれない。

でも、もう迷っている時間はなかった。鈴山は、決心した。

注射をした、次の日の朝。鈴山が、哺乳瓶を近づけてみる。

すると赤ちゃんキリンは、すぐに口でくわえ、いきおいよく飲みはじめたのだ。

「飲んだ！」

まわりで見ていた飼育員たちが笑顔になった。

哺乳瓶のお乳を飲みほした赤ちゃんキリンは、大きな目を動かして、『もつとないの？』と、鈴山を見つめてくる。

「いい子だ。生きろよ。」

うれしくて泣きそうになるのをこらえ、鈴山は、赤ちゃんキリンの首をそつとなでた。

赤ちゃんキリンは、飼育員の手で育てることになった。

もともと弱いキリンの赤ちゃん。そのうえ、ひとまわりも小さい。

さらに、母親キリンの初乳ではなく、粉ミルクの牛の初乳しか飲んでいない。

ちゃんと生きられるのだろうか。

キリンに限らず人が育てた動物は、もうだいじょうぶと思っただけでも、とつぜん、死んでしまうことがある。

毎日、毎日が、綱わたりのようだ。

鈴山は、東京にある多摩動物公園に連絡をした。

多摩動物公園は、二〇一一年にキリンの人工哺育に成功していた。どうやって育てていたのか教えてもらおう。

おなじようにやってみる。

さいしょの目標は、一週間。次は、一か月だ。

生まれてから一か月生きることができたら、赤ちゃんキリンがこれからも生きつづける可能性がとて高くなる。

鈴山たちは、たいせつに、たいせつに赤ちゃんキリンを育てていった。

鈴山たちの心配をよそに、赤ちゃんキリンは、すくすくと成長していった。

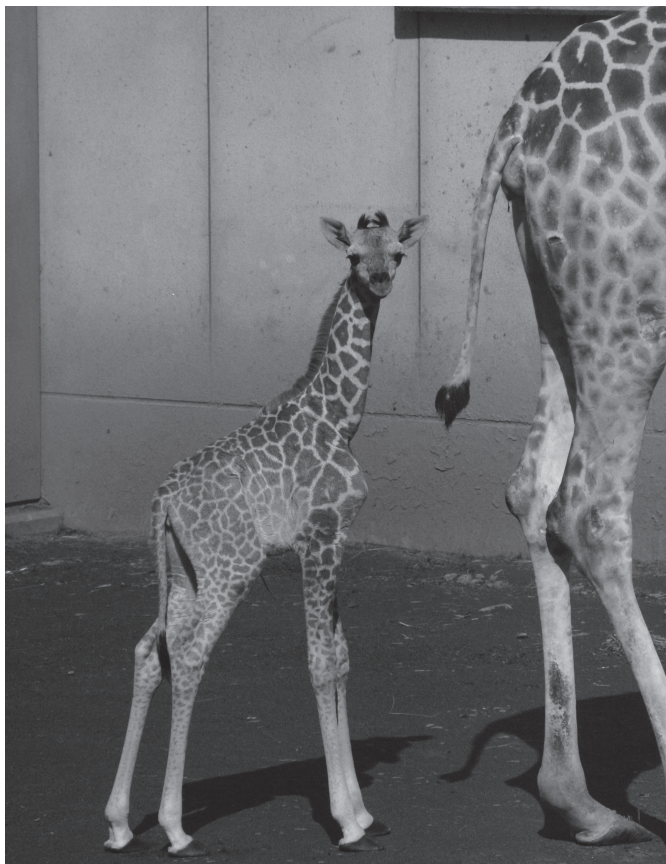
そして、四月二十四日。生まれてから一か月。

「おはよう！」

飼育員たちの声が、はずんでいる。

いつ、死んでしまうかわからないから、今日までずっと、赤ちゃんキリンが生まれたことは盛岡市動物公園ではたらく人以外に、いえなかったのだ。

でも、一か月たった。もう、まわりの人に『生まれたよ！』といっている。



どうぶつえん^{ひと}にきた人たちの公募で、^{こうぼ}北国の名産品でもある「リンゴ」に
^{あいしやう}愛称が決まった^{あか}赤ちゃんキリン。

「麒麟の赤ちゃんあかが、生まれたよ。」

「とってもかわいい、女の子おんなこだよ。」

「みんな、会あいにきて！」

たくさんの人ひとに、かわいがってもらいたい。

飼育員しいくいんたちは、愛称あいしょうを募集ぼしゅうすることにした。

「赤ちゃんあか麒麟に、愛称あいしょうをつけてください！」

園内えんないにおいてある専用せんようの応募用紙おうぼうしで集あつまった愛称あいしょうは、千八百五十通ちゅう。

そのなかで、いちばん多おほかったのは、「リング」だった。

父親ちちおやのリングの「リング」。そして、母親ははおやのユズも、果物くだものの名前なまえだ。

「リング、いいね。」

「かわいい。」

「リングにしよう。」

「それに、いつかお嫁よめにいったときに、果物くだもののりんごが名産めいさんの北国きたぐに、盛岡もりおかからきた麒麟

だって、思いだしてもらえるよね。」

そう。

赤ちゃんキリンは生まれたときから、ほかの動物園にお嫁にいくことがほぼ決まっていた。

アフリカのキリンは、住んでいるところの食べ物へったり、密猟されたりして、とても少なくなっていた。これ以上、アフリカからキリンをつれだしたら、地球上のキリンがいなくなってしまうかもしれない。

二〇一六年に、国際自然保護連合は、キリンを絶滅危惧Ⅱ類に指定した。

いま、日本の動物園では、アフリカからキリンをつれてくるのではなく、おたがいに協力あつて日本にいるキリンをペアにして、赤ちゃんを産んでもらうようにしている。

3 リンゴのお嫁入り、決まる

盛岡市動物公園のキリン舎の建物の外には、ひろい運動場がある。

高い木があり、なだらかな丘があり、運動場というより、緑ゆたかな公園のようだ。シ

マウマとダチョウもいつしよに運動うんどうできるようになつてゐる。

もともと盛岡市動物公園もりおかしどうぶつこうえんは、小高い山こだかやまのなかにあるため、運動場うんどうじょうのまわりにも緑みどりがたくさんあり、鳥とりの声こえもきこえてくる。

リングは、どんどん成長せいちょうしていった。二か月げつたつと、木の葉こはを食たべられるようになった。

背せも、あつという間まに二メートルをこえた。

運動場うんどうじょうを歩きまわり、おとずれる人ひとたちを笑顔えがおにしている。

人ひとの手てで育てたそだせいか、リングはとも人ひとなつっこい性格せいかくだった。

キリン舎しやで、飼育員しいくいんが一日三回いちにちかいのミルクの準備じゆんびや、食事しょくじのしたくをしていると、近づちかづいてのぞきこんでくる。

柵さくに顔かおをおしつけてきたり、くりつとした大きな目めで、じつと見つめてきたり。

とてもかわいらしい。

きびしい寒ささむの盛岡もりおかの冬ふゆもぶじにすごし、三月がつには、一歳さいの誕生日たんじょうびをむかえた。

秋あきになり、一歳半さいはんになると、背せは三メートルまでのびた。飼育員しいくいんたちも、見みあげるほどだ。

そんな、ある日のこと。

「えつ、もう決まったんですか？」

鈴山が声をあげた。リンゴがお嫁にいくところが決まったというのだ。

「どこですか？」

「上野動物園。ヒナタのお嫁さんだ。」

リンゴが、新しい家族を作るのはうれしい。しかも、岩手県よりもあたたかいところに
ある、東京の上野動物園だ。

日本でさいしょにできた上野動物園には、一年をとおして、たくさんのお客さんがく
る。リンゴもきつと、おおぜいの人に愛されるだろう。

だけど、あまりにも早かった。まだ、二歳にもなっていないのだ。

大きな目で、鈴山を見つめてくるリンゴの顔が目に浮かぶ。

もつと、そばにおいておきたい。それに、もつと盛岡の人たちに見てもらいたい。

けれど、そうはいっていられなかった。

六歳さいになる母親ははおやのユズの背せは、四メートルをこえている。七歳さいのオスのリントは、五メートルだ。

そんなに背せの高い動物どうぶつをトラックにつんだら、トンネルでつかえたり、踏切ふみぎりで電線でんせんにふれたりしてしまう。日本の法律にっぽんほうりつでは、多くおほの道路どうろで荷台にだいの高さたかが三・八メートル以上あるトラックは、走はしらせてはいけないことになっていた。

キリンは、背せが低いひくこどものうちのほうが安全あんぜんに運はこべる。それに、新しい動物園どうぶつえんでの生せい活かつにもなじみやすいのだ。

もりおかしどうぶつこうえん すずやま
盛岡市動物公園の鈴山すずやまのところに、女性じよせいの声こえで電話でんわがかかってきた。

うえのどうぶつえん
「上野動物園うえのどうぶつえんの、矢部やべです。」

ひつこ
引ひつ越こしを担当たんとうする係かへりの係長かへりちやうだ。

さつそく、引ひつ越こしの日ひにちを決きめていく。

どうぶつ
「動物どうぶつの引ひつ越こしは、冬ふゆは寒さむいし夏なつは暑あつくて動物どうぶつが弱よわります。上野動物園うえのどうぶつえんでは、いつも春はるか秋あきにおこなっていますが、今回こんかいも、春はるということでもいいでしょうか。」

「はい。ただ、盛岡は春休みのころはまだ寒くて雪もありますから、そのあとのほうが、いいと思います。」

「わかりました。春休みもゴールデンウィークも、お客さんがふえて、おたがいに忙しくなりますから、そのあいだの四月がよさそうですね。」

四月。あと、数か月しかない。

リングは、ユズとはなれて、だいじょうぶなのだろうか。

でも、がんばってもらうしかない。

「四月にしましょう。できれば、ここから出すのは、盛岡市動物公園の休みの日をお願いしたいんです。休園日は、水曜日なのですが。」

「そうですか。上野動物園の休園日は、月曜日なので、月曜につくようにしたいと思っています。いたのですが、でも、そちらのご都合にあわせます。」

「ありがとうございます。」

盛岡市動物公園から上野動物園は、五百キロメートル以上はなれている。朝、出発しても、到着するのは夜になってしまう。

話しあつた結果、四月十二日、水曜日の夕方に盛岡市動物公園を出て、道がすいている夜のうちにゆつくり走り、翌日の木曜日の朝、上野動物園につくことになった。

二月になった。上野動物園から飼育員といつしよに、引越し係の伊藤がリンゴのもとにやつてきた。

リンゴが、どんなところで、どのように飼育されているのか調べるためだ。

どんな餌を食べているのか。

キリン舎の建物のなかは、どんなくふうしてあるのか。

運動場はどんな感じで、何時にどのくらい運動させているのか。

新しい場所になれるまでは、生活のリズムや食べるものはできるだけ変えない。リンゴが困らないようにするためだ。

「やはり、冬は寒いですね。わたし、前にいちどきたことがあるんですが、そのときは夏だったのだ。」

あたりにつもっている雪を見ながら、伊藤が、鈴山に話しかける。

「秋田県あきたけんにくらべると少ないすくんですが、この岩手県いわてけんの盛岡市もりおかしでも年ねんに数回すうかいは、ドカ雪ゆきになりますね。だから、冬ふゆのあいだはずっと休園きゅうえんにします。」

「寒さむくても、キリンは元氣げんきですか？」

「はい。夜よるは、室内しつないを暖房だんぼうしていますし、寒さむさには、けっこう強つよいです。」

「この運動場うんどうじょうに雪ゆきがつもったら、どうするんですか？」

伊藤いとうが、上野動物園うえのどうぶつえんよりも何倍なんばいもひろい運動場うんどうじょうを見わたしてたずねる。

「キリン用ように一部いちぶだけしきりをして、そのなかを雪ゆきかきですよ。」

そりやもう、たいへんなんですと苦笑にがわらいしながら、鈴山すずやまがこたえた。

くもりや雪ゆきの日ひでも、日光にっこうは雲くもを通とおってふりそそいでくる。日光にっこうをあびると、動物たちどうぶつ

の体調たいちようがとてよくなるのだ。

とはいえ、雪ゆきですべてころんだら、けがをする。とくに、細身ほそみで背せの高いキリンがけがをすると、そのまま死しんでしまうこともある。

キリンたちがけがをせずに運動うんどうできるのなら、雪ゆきかきのたいへんさなど、たいしたことではないのだ。

そのとき鈴山^{すずやま}は、伊藤^{いとう}がちらちらと、ユズを見^みていることに氣^きがついた。

「白^{しろ}いでしょ？」

さいしよは、ユズの白^{しろ}さが氣^きになるのかと思^{おも}つてきいてみた。

けれど伊藤^{いとう}は、うれしそうに笑^{わら}つてこたえた。

「わたし、ユズの担当^{たんとう}をしていたんです。」

ユズも二年前^{ねんまえ}に、この盛岡市動物公園^{もりおかしどうぶつこうえん}にお嫁^{よめ}にきたのだった。それまでは東京^{とうきょう}の多摩動

物公園^{ぶつこうえん}にいて、そのとき多摩動物公園^{たまどうぶつこうえん}にいた伊藤^{いとう}が担当^{たんとう}をしていたのである。

「え？　じゃあ、以前^{いぜん}ここにきたということは？」

「はい、こつそり会^あいにきたんです。」

「そうだったんですか。」

「ユズは、ほつそりとしたキリンなので、ちゃんとお母^{かあ}さんになれるか心配^{しんぱい}していまし

た。」

「はい、いい子^こを産^うんでくれました。」

「リング、元氣^{げんき}な子^こですね。お父^{とう}さんのリンタに似^にて、しっかりしたからだつきですね。」

「もつと、ユズのそばにいつていいですよ。」

鈴山すずやまがうながしたけれど、伊藤いとうは首くびを横よこにふる。

「いえ、いいんです。キリンは、人ひとのことは忘れてしまうので、知しらないわたしがそばにいくと、不安ふあんになりますから。」

鈴山すずやまは、うなずいた。

「鈴山すずやまさん。ユズが、多摩動物公園たまどうぶつこうえんから運はこばれるときは、大あばれしたんです。キリン輸ゆ送箱そうばこに入れてふたをしめたたん、ばーん、ばーん！ と、箱はこをけりまくつて。もう、脚あしが折おれてしまうのではないかと、見みているほうが泣なきそうになりました。」

引ひつ越こすとき、キリン輸送箱ゆそうばこのなかで、キリンがあばれることがある。

けがするのではないか。とくに、クレーン車しゃでつりあげたときにあばれたら、キリン輸送箱そうばこが大きいゆれて、クレーン車しゃごとたおれてしまうのではないかと、飼育員しいくいんたちは生いきた心地こころがしない。

それにキリンは、心配しんぱいなことがあるとすぐに弱よわつてしまう。

食しょく事をしなくなり、あつという間まに死しんでしまうときだつてある。

引^ひつ越^こしは、キリンの命^{いのち}を左^{ひだり}右^{みぎ}するたいへんな作^さ業^{ぎょう}だ。だから、キリンが落^おちついて移^い動^{どう}できるよう、前^{まえ}もつてさまざまな準^{じゅん}備^びをすることは、とてもたいせつなのである。

「リングがぶじに運^{はこ}ばれるよう、訓^{くん}練^{れん}もしつかりやりますよ。」

「はい。よろしく願^{ねが}います。」

伊^い藤^{とう}は、につこり笑^{わら}って頭^{あたま}を下^さげた。

4 引^ひつ越^こしのための訓^{くん}練^{れん}

三月^{がつ}になると、リングの訓^{くん}練^{れん}がはじまった。

さいしょの訓^{くん}練^{れん}は、ユズからはなすことだ。

いつもいつしよにいる、仲^{なか}のいい母^{おや}娘^こ。キリン舎^{しゃ}のなかにある、二頭^{とう}が生^{せい}活^{かつ}している部^へ

屋^やを、シャッターでわけるのだ。

飼^し育^{いく}員^{いん}が、葉^はつぱのついた枝^{えだ}を持^もって柵^{さく}の外^{そと}に立^たつ。もうひとりが反^{はん}対^{たい}側^{がわ}に立^たった。ユ

ズとリングがそれぞれの飼^し育^{いく}員^{いん}に近^{ちか}づき、二頭^{とう}がはなれたところでシャッターのスイツチ

が入れられた。

キリン舎の六メートル以上ある高い天井から、ゆつくりとシャッターがおりてくる。

ユズもリンゴも、なにが起きているのかわからず、不安そうな顔をしている。

一分ほどかけてシャッターが床までおりると、おたがいの姿はまったく見えなくなつた。

リンゴは、部屋のなかをぐるぐると早足で歩きはじめる。

耳は後ろに、ぺたーつとはりついて、不安な気もちをあらわしている。

「だいじょうぶ、だいじょうぶだからね。」

柵の外から飼育員が、やさしく声をかける。

毎日、こうしてシャッターで二頭をわけて、母娘をはなす訓練がくりかえされた。

二〇一七年三月二十四日。リンゴは二歳の誕生日をむかえた。

その数日後、東京から、高さが三メートルもあるキリン輸送箱が運ばれてきた。

すでに、背が三・五メートルまで成長したリンゴより少し小さいけれど、木でできたキ

リン輸送箱は窓のようにあいているところがあり、リンゴが顔を出せるようになってい
る。

今日からは、このキリン輸送箱に入る訓練である。

キリン輸送箱はクレーン車でつりあげられ、キリン舎の建物の出入り口に、ぴつたりと
つけておろされた。

扉がひらいてリンゴが運動場にいこうとすると、そのままキリン輸送箱のなかに入るし
くみだ。

キリン輸送箱をおく前に、木の板や角材をしいて、ゆれないように工夫がしてある。

リンゴがなかに入ったときにぐらりとゆれたら、『ここはこわいところ!』と、思っ
て、もう入らなくなってしまうからだ。

「よし、いちどやってみるか。」

鈴山の声を合図に、建物の扉があげられた。

みんなが、リンゴを見つめる。

リンゴは、外に出られるものだと思って、そわそわしながら扉のそばに進んでいく。け

れど、扉とびらの先さきにあるキリン輸送箱ゆそうばこを見つけて、ぴたつと歩くあるのをやめた。

『なに、これ？』

そんな、リンゴの声こえがきこえてきそうだと。

「リンゴ。」

キリン輸送箱ゆそうばこの窓まどのむこうから、知しっている声こえがする。

女性じよせいの飼育員しいくいんが、リンゴの好きすなヤナギの枝えだをふって呼よんでいた。

でも、リンゴは用心ようじんしている。いつまで待まっても、キリン輸送箱ゆそうばこのなかに進すすもうとしな

かった。

「うーん、このようすだと何日なんにちか、かかるかもしれないな。」

鈴山すずやまが、つぶやく。あせつても、どうにもならない。リンゴにまかせるしかないのだ。

引ひ越こしの日ひまで、あと二週しゅうかん間。

まにあうだろうか。

そう心配しんぱいしたもの、その日ひの夕方ゆうがたふと見みるとリンゴはキリン輸送箱ゆそうばこのなかに入はいってい

た。

「入^{はい}っている！」

「リング。こわいものなしだね。」

リングは、窓^{まど}になつた部分^{ぶぶん}から顔^{かお}を出^だし、運動場^{うんどうじやう}を歩^{ある}くシマウマやダチョウをながめていた。

翌日^{よくじつ}も、おなじ訓練^{くんれん}がつづいた。

シャッターで、ユズとわかる。扉^{とびら}があいて、麒麟輸送箱^{きりんそうばこ}が現^{あらわ}れる。

リングは、前^{まえ}に歩^{ある}きながら入^{はい}り、おしりから後^{あと}ずさりしながら出^でていく。後^{あと}ずさりしながら出^でるようすは、まだ、ずいぶん緊張^{きんちやう}しているようだ。

ところがあるとき、リングが長い首^{ながくび}をくるとまわしてふりむいたときに、からだが逆^{さか}を向^むいた。麒麟輸送箱^{きりんそうばこ}のなかで、まわれ右^{みぎ}ができたのだ。

『あれ、まわれる！』

そうわかつたリングは、急^{きゆう}に落^おちつき、麒麟輸送箱^{きりんそうばこ}のなかを自由^{じゆう}に行^ゆき来^きできるよ
うになつていた。

訓練くんれんの三つめは、キリン輸送箱ゆそうばこのなかにとじこめることだった。箱はこのなかで、じつとできなければ東京とうきょうまで運はこべない。

リンゴはいま、自由じゆうに出でられるから入はいるのだ。

後ろうしの扉とびらをしめたらどうなるのだろうか。キリンは、『扉とびらがしめられた！』と、わかつたとたん、あわてて出でようとして、箱はこのなかで大おおあばれすることがある。

リンゴ、あばれないで。

飼育員しいういんたちが、心配しんぱいそうに見みまもるなか、そうつと建物たてものの扉とびらがしめられる。

リンゴが、ちらりと後ろうしをふりかえる。

出でられないことが、わかつた！ さあ、リンゴ、どうする？

飼育員しいういんが、身みがまえる。

ところが。

『しめたんだ。ふーん。』

そんな表情ひょうじようで、前まえを向むきなおす。リンゴのようすはまったく変かわらなかつた。

さすがリンゴ。はじめてのことも、見みなれないものも、こわがらずになんでもやってみる。

そして、人間が大好き。

もしも、飼育員のことを信頼して、

『扉がしめられても、みんながいるからだいじょうぶ。』

そんなふうに、思ってくれているのだとしたらうれしい。

5

上野動物園の準備

そのころ、上野動物園でも、リングを受けいれる準備が進められていた。

東京にもどった伊藤たちは、盛岡市動物公園のキリン舎の部屋の床に砂がしかれていたことを伝え、おなじように部屋にも砂をしくことにした。

しくのは、ちよつととくべつな火山礫という赤い砂。

上野動物園の運動場にしているのと、おなじものだ。

キリンの爪はのびても、人がかんとんに切ることができない。けれど、この赤い砂の上をキリンが歩くと、うまいぐあいに爪がけずれるのだ。

餌えさも、盛岡市動物公園と、できるだけおなじものを手配てはいする。

もりおかしどうぶつこうえん
盛岡市動物公園では、ヤナギの葉はやクワの葉は、大麦おおむぎや、りんごなどの果物くだもののほか、乾燥かんそうさせた草くさをかためたペレットをあたえていた。上野動物園うえのどうぶつえんでも、大麦以外おおむぎいがいは、ほとんど手てに入れることができる。

ただ、キリンは味あじにうるさい。

ペレットのなかに入はいっている草くさの種類しゅるいがちがうだけで、食たべなくなることがあるのだ。
ははおや
母親ははとわかれ、住すむ場所ばしょも新あたらしくなる。見みたことのない飼育員しいういんにかこまれ、まわりにいる動物どうぶつたちの鳴き声なごえも、においも景色けしきも変かわる。

リングにとつては、とまどうことばかりだ。

うえのどうぶつえん
上野動物園うえのどうぶつえんにきたリングが、少すこしでもちゃんと食たべられるよう、できるだけおなじ餌えさを手配てはいしていく。

リングの引ひつ越こしに使う道具どうぐの手配てはいは、送おくりだす側がわではなく、ひきとるほうの動物園どうぶつえん、つまり今回こんかいは、上野動物園うえのどうぶつえんがすることになっている。

車両^{しやうりやう}などを担当^{たんとう}するのは、引^ひつ越^こし係^{がかり}の木岡^{きおか}。

木岡^{きおか}が手配^{てはい}したひとつが、リンゴがいま、なかに入る^{はい}訓練^{くんれん}をしているキリン輸送箱^{ゆそうばこ}である。

キリン輸送箱^{ゆそうばこ}は、なんでもいいわけではない。

キリンが、ちゃんと入^{はい}れる大^{おお}きさがあること。なかであばれても、こわれないこと。それがきちんと証明^{しょうめい}されて、東京^{とうきやう}都^との許可^{きよか}をうけたキリン輸送箱^{ゆそうばこ}でなければ、使^{つか}つてはいけないことになっている。

上野動物園^{うえのどうぶつえん}は、キリン輸送箱^{ゆそうばこ}を持^もっていないため、おなじ東京^{とうきやう}都^とにある多摩動物公園^{たまどうぶつこうえん}のもの^かを借^かりた。

つづいて、キリン輸送箱^{ゆそうばこ}を運^{はこ}ぶ、トラックとドライバーの手配^{てはい}だ。これも、だれでもないというわけではない。動物^{どうぶつ}、とくにキリンのことをよく知^しっていて、背^せが高^{たか}くてバランスがとりにくいキリン輸送箱^{ゆそうばこ}を、上^{じやう}手^ずに運^{はこ}んでくれる人^{ひと}でないとまかせるわけにはいかない。

むずかしい動物^{どうぶつ}の引^ひつ越^こしは、専門^{せんもん}の会社^{かいしや}がおこなっている。

今回は、ライノの竹内にたのむことにした。

竹内は、これまでに何頭ものキリンを運んでいる。いま上野動物園にいるオスのヒナタも、神奈川県かながわけんの野毛山動物園のげやまどうぶつえんから、竹内が運んできたのだ。

動物を運ぶだけでなく、東日本大震災ひがしにほんだいしんさいのときは、被害ひがいのあった東北地方とうほくちほうの動物園どうぶつえんのために、なんども餌えさを運んだ。

飼育員しいういんとおなじくらい、いや、もしかしたらそれ以上に動物どうぶつのことが好きで、動物にとつてどうすればいいのかを、いつも考えながら仕事しごとをするベテランである。

引越ひこし係がかりの木岡きおかは、盛岡市動物公園もりおかしどうぶつこうえんから上野動物園うえのどうぶつえんまでの道のりみちをたしかめた。

約やく五百三十キロメートル。盛岡市動物公園もりおかしどうぶつこうえんを出発しゅつぱつしたあと、すぐに東北自動車道とうほくじどうしやどうのり、宮城県みやぎけん、福島県ふくしまけん、栃木県とちぎけん、群馬県ぐんまけん、埼玉県さいたまけんと通り、さいごは東京都とうきょうとを走ることになる。

動物を運ぶときは、通るすべての都道府県とどうふけんの担当者たんとうしやに連絡れんらくしなければならない。万が一まんいち、動物が逃げたときに、すぐに対応たいおうしてもらえるようにするのだ。

「キリンとはいえ、逃げだしたらたいへんだからね。」

机つえの上うへで地図ちずを広ひろげる木岡きおかに、係長かかちやうの矢部やべが声こゑをかける。

「前まえに、キリン輸送箱ゆそうばこをこわしたキリンがいきましたよね？」

地図ちずから顔かおをあけて、木岡きおかがたずねる。

となりで伊藤いとうが、うなずきながら会話かいわにくわわる。

「箱はこのなかにいるのがよほど、がまんができなかったらしく、首くびでばーん！　つて。」

伊藤いとうが、キリンの動きうごをまねて、キリン輸送箱ゆそうばこの天井てんじやうをやぶるように頭あたまを動かうごかした。

オトナのオスのキリンは、首くびの力ちからが強いつよ。もしも本気ほんきであればたら、キリン輸送箱ゆそうばこの天井てん井じやうなどかんたんにこわしてしまふだろう。

「引ひつ越こしは、動物どうぶつにもストレスがかかるからね。命いのちをあずかっているんだもの、しっかりと準備じゆんびをしましょう。」

「はい。」

係長かかちやうの矢部やべの言葉ことばに、木岡きおかと伊藤いとうが真剣しんけんな顔かおをしてうなずいた。

6

盛岡市動物公園、さいごの日

四月^{がつ}十二日^{にち}、水曜日^{すいようび}。リンゴが、盛岡市動物公園^{もりおかしどうぶつこうえん}をはなれる日^ひがきた。
四月^{がつ}だというのに盛岡^{もりおか}では数日^{すうじつ}前に雪^{ゆき}がふり、道路^{どうろ}のわきにはまだ解^とけきらない雪^{ゆき}が残^{のこ}っている。

雲^{くも}のあいまから、太陽^{たいよう}がときどき顔^{かお}をのぞかせるものの、冷^{つめ}たい風^{かぜ}のふく日^ひだった。
さいごの夜^{よる}をすごしたリンゴとユズは、キリン舎^{しや}の部屋^{へや}でずっとよりそっている。
毎日^{まいにち}の訓練^{くんれん}とおなじように、朝^{あさ}になるとシャッターがおろされて二頭^{とう}がはなされた。
ユズが見えなくなつたリンゴは、いつものように部屋^{へや}のなかを走^{はし}りまわる。

『お母^{かあ}さん、お母^{かあ}さん。』

そういうながら、探^{さが}しているように見える。

だけどこのとき、もう二度^{にど}とユズに会^あえなくなるとは思^{おも}いもしなかつただろう。

昼近くになると東京から、ライノの竹内が運転するトラックがリンゴをむかえにやつてきた。

麒麟輸送箱をつりあげるための、クレーン車もきた。

リンゴが旅立つ準備が、ちやくちやくと進んでいく。

午後になった。

リンゴは、部屋の中をゆつくりと歩いている。

リンゴが落ちついていることをたしかめて、麒麟輸送箱につづく扉があげられた。

今日は訓練ではない。本番なのだ。

リンゴの目の前に麒麟輸送箱が現れる。近づいてきたリンゴは、ふつと立ちどまつた。

いつもなら窓のむこうの運動場に、シマウマやダチョウがいるのが見える。だけど、今日はだれもない。

しーんと、静まりかえった運動場を見たリンゴは、その場から動こうとしない。

『麒麟輸送箱に入らないかも？』

いつしゅん、飼育員が心配したけれど、リングは、そのあと決心したかのように前に進み、キリン輸送箱のなかに入っていた。

キリン輸送箱の窓の外では、高さのある脚立の上に女性の飼育員が座り、リングの好きなヤナギの枝をふって、気をひきつけている。

そのあいだに男性の飼育員たちが、キリン輸送箱の後ろにふたをした。

木の板でできたふたがビスでとめられていく。そのたびに、電動工具のグユグユン！という大きな音がする。

それでもリングはへいきな顔をして、前を見つづけていた。

休園日の今日は、キリン担当以外の飼育員も集まっていた。

リングを不安にさせず手ぎわよく終わらせるため、おおぜいで作業をいつきに進めている。

リングが顔を出している窓の前には、カーテンをかけるように木の板がつけられた。リングはもう、運動場を見ることができなくなつた。

女性飼育員が、木の板をくぐるようにしてリンゴが顔を出している窓のそばに行く。人がいると安心するののか、リンゴは耳を後ろにぺたつとはりつけることもない。

キリン輸送箱全体に、大きな布のカバーがかけられる。

さらにもう一枚。

雨や風が入らないようにして、リンゴをまもるためだ。

布カバーは、リンゴが顔を出す窓の下だけはすきまが作られていて、くぐっていけばリンゴのようすを見られるようになっていいる。

さいごは、布カバーが飛ばないように上からロープがかけられた。

上野動物園につくのは、明日の朝だ。飼育員がバケツに餌を用意した。

ペレット、大麦、りんご。リンゴの大好きなヤナギの枝は、盛岡市動物公園の園内にある木を切ってきた。まさに、ふるさとのお味だ。

飼育員が、布カバーの下にあるすきまから入って、バケツをキリン輸送箱のなかに入れてようとすると、ライノの竹内がとめた。

「トラックがゆれたときに、のどにつまらせるといけないので、高速道路のサービスエリ

アで休むときにあげます。」

そういいながら、飼育員からバケツを受けとった。

トラックの荷台にのせるため、クレーン車のアームがのびてキリン輸送箱をつりあげる。

地面からはなれたとき、キリン輸送箱がぐらりとゆれる。

飼育員たちが、いちばん緊張する場面だ。

『あばれないでくれ、リングゴ!』

全員が念じるように見つめるけれど、リングゴは落ちついていた。

キリン輸送箱が、トラックの荷台にそうつとおろされる。リングゴは後ろ向きの状態だ。

こうしておけば、もしも急ブレーキをかけてもぶつかるのはおしりだからだ。

キリン輸送箱が動かないように、しっかりと固定される。

さいごに鈴山が、トラックの荷台に上がり、布カバーをくぐってリングゴのそばに行く。

かわいいリングゴ。たいせつに育ててきたリングゴ。

リングが、鈴山を見つめている。

鈴山は、そつと声をかけた。

「長旅だけど、がんばるんだぞ。元気でいろよ。ヒナタと仲よくな。」

十五時。すべての準備がととのつた。

リングが東京にいくということで、たくさんのテレビ局や新聞社の人が取材にきてくれた。

リングの名づけ親の代表になつてくれた、中学生の女の子が書いてくれた手紙と、盛岡市動物公園を応援してくれる人たちがくれた花束もトラックの助手席にのせられる。

「できるだけ早く、南に進んでください。」

鈴山が、ライノの竹内に伝えた。

すでに気温は、十度まで下がっている。夜になれば、もつと寒くなるはずだ。少しでも早く、あたたかい南に進んでほしかった。

「わかりました。では、いきます。」

ライノの竹内たけうちは、そういうと運転席うんでんせきにのりこんだ。

もりおかしどうぶつこうえん　盛岡市動物公園の門もんまでは、飼育員しいくいんたちが小走りこばしにトラックの前まえをいき、道路どうろのわきにある木の枝えだが、リンゴの入はいっているキリン輸送箱ゆそうばこにあたらないか見てみている。

小さなカーブちひがいくつもつづいて、右みぎへ左ひだりへとトラックがゆれる。

路面ろめんのアスファルトはつぎはぎだらけで、タイヤがのりあげるたびに、がたがたとゆれた。

くら　暗いキリン輸送箱ゆそうばこのなか、リンゴはひとりぼっちで、なにを思おもっているのだろうか。もりおかしどうぶつこうえん　盛岡市動物公園の門もんにきた。

飼育員しいくいんがいつしよにきてくれるのは、ここまでだ。

「よろしく願ねがいします。」

鈴山すずやまが、竹内たけうちにもういちど声こえをかける。

「上野動物園うえのどうぶつえんについたら連絡れんらくします。」

竹内たけうちはそういうと、そうつとアクセルをふんで盛岡市動物公園もりおかしどうぶつこうえんを出発しゅっぱつした。